

## 小・中学校の学校力向上を目指した学校コンサルテーション

～特別支援学校のコーディネーターを中心としたコンサルテーション手法の検討～

2016年8月6日  
第6回フォーラム in JMER トークセッション  
障害者差別解消法とインクルーシブ教育  
東京都立水元特別支援学校 日高浩一

## 目的と課題

特別支援学校のセンター的な役割が学校教育法上明確にされてから10年目

↓  
小・中学校からの支援要請の変化

制度理解, 発達障害等の特性理解

↓  
個々の児童生徒のアセスメントに基づく支援方策への助言

しかし、公立学校の場合、教師は5年程度で勤務校を異動

↓  
個別的コンサルテーションによる介入技法の学校への定着には困難が伴う

個人要因から発想を広げ組織レベルの改善を行うことで、将来の問題も含めた幅広い対処ができる (伊藤,2009)

↓  
児童生徒が直面する困難に直接焦点をあてて問題解決を図る以前に、基盤となる学校組織の改善を図る予防的な取り組みや組織コンサルテーションに関する研究蓄積が今後求められる

佐藤美友貴・加瀬進(2014).近年の学校コンサルテーション研究の動向と課題—通常学校・通常学級を対象とした実践事例研究を中心に—,東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ 65,p.165-p.173

小・中学校の支援要請に対し、

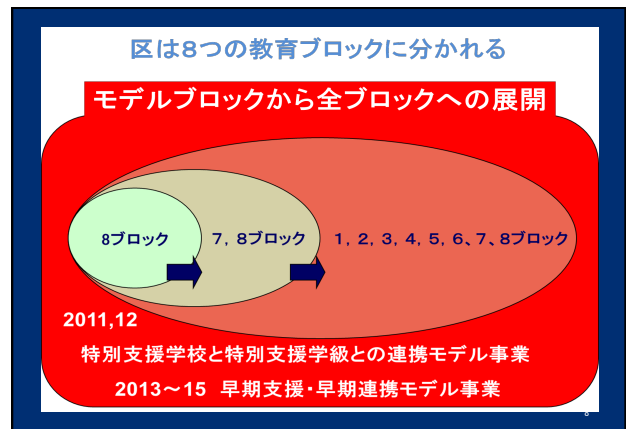
個別的コンサルテーション(危機介入)

組織的コンサルテーション(予防的・開発的コンサルテーション)

の両面から取り組んだ事例を検討し、学校力(学校組織としての支援基盤)の向上を目指すコンサルテーション手法について検討することを目的とする。

## 方法

水元特別支援学校が支援を実施してきた小・中学校のうち、継続的にコンサルテーションを実施した小学校2校、中学校1校、計3校について、学校訪問記録の記述から、学校の取り組みへの助言・提案・相談と教師・校内の組織的な取り組みを中心に抜き出し、変容のプロセスを検討した。



特別支援学校のセンター的機能から葛飾区  
 のセンター機能へ

目的は教育システムの変革によって、共生  
 地域作りへつなげること。  
 (誰もがそこにいられる、多様な在り方を  
 相互に認め合える全員参加型の社会づ  
 くり)

インクルージョンの視点に立ったこれからの学  
 校

原点は、1994年ユネスコ(国連)による「サラ  
 マンカ宣言」にある。

↓

「特別なニーズに関する行動のための枠組  
 み」

どの子供にもある多様なニーズ

障害(発達障害、肢体不自由等)、不登校、非行、  
 学習の遅れ、家庭の問題(虐待、ネグレクト、貧困  
 等)、日本語の未修得、...

\* 困っている子供 ← × 困った子供(主体が  
 間違っている)

\* 目的を特別支援(障害)にしぼったら、全教  
 職員が行う支援になるにはより多くの時間  
 がかかる。真のインクルーシブという方向  
 性により、より早く支援体制を構築できる。

葛飾区専門家チームの派遣での役割

①個々のケースのコンサルテーション  
 → 危機介入

②校内支援体制(ケース会議の持ち方、校内  
 委員会の運営等)へのコンサルテーション  
 → 予防的働き

\* コンサルテーションとは、間接的に支援する人「コンサルタント」による、直接支援する人「コンサルティ」への支援のことをいう。これはタテの関係ではなく、専門家同士の協働作業である。

\* 葛飾区専門家チームも協働チーム  
(教育専門員、心理専門員、支援学校教員)

派遣するチームのメンバー、組み合わせなどを決める司令塔は、葛飾区教育委員会

13

## コンサルテーション手法の例

### 事例1 (A小学校)

- ①具体的な行動とその役割を明確にする ケース検討会を行うこと。
- ②短時間に必要な時に教員が 立ち話ケース会を行うこと。
- ③ 全教員でケース検討会を模擬的に体験すること。

14

- ④医療との連携の仕方を考えること。
- ⑤ 毎年全教員に対しての模擬的なケース検討会を開いていくこと。
- ⑥専門家チームの 心理士を活用すること。
- ⑦ 学校全体でケースに当たること。
- ⑧ 支援員との関わり方 (サブティーチャーとの連携) や 医療との付き合い方 を検討すること。
- ⑨家庭との協力の方法や中学校に向けてできる課題を考えること。

15

## <コンサルテーションの視点>

(1)葛飾区が行っている専門家チームの派遣は、あくまで学校側からの要請がないと行われない(学校にスキルがなければ、要請もできない)。この小学校では、自校のコーディネーターが、通常級と特別支援学級の隔てなく 自分からコーディネートしていくことができているケース。訪問を積み上げる中で、ケース検討会の定着など学校組織の在り方の変容につなげたいと考えた。

16

(2)一人の児童を年度を越えて継続して観察することで、縦の連携を強化し、さらに中学校にもつなげることを考えた。

17

### 事例2 (B小学校)

- ① 20分の休み時間を利用してケース検討会を行うこと。
- ②教室を 構造化すること。
- ③ 学校全体が同じ方向性をもって動くこと。
- ④担任とサブティーチャーである支援員の 効果的な役割分担を考えること。
- ⑤転学も視野に入れた、具体的で長期の保護者対応を考えること。
- ⑥校内での チームの作り方を検討すること。

18

<コンサルテーションの視点>

- (1)特別支援学級においては担任だけでなく、学級全体の教員で子どもたちをみていくことやケース検討会の文化を根付かせることを考えた。
- (2)教室の構造化を通して、成果を自覚し、教員が自分たちで学級を変えていきたいという意識が生まれることをねらった。
- (3)継続して外部から関わることで、保護者の特別支援教育への意識を変化させることをねらった。

19

事例3 (C中学校)

- ① 特別支援教育の市民権を得るために、全校研修会では生徒ケースを中心に進めること。
- ② 作成に時間がかかり、活用されていない今までの様式を止め、「短期の個別指導計画」を作成すること。
- ③ 生徒の「プラスのプロフィール」を作成すること。

20

- ④ 自校の財産としてある「特別な配慮を要する生徒のチェックリスト」を有効に活用すること。
- ⑤ 児童相談所と連携すること。
- ⑥ 「エコマップ」づくりを自立した校内研修会で行うこと。

\* エコマップ: 児童・生徒を支援するために、本人、家族、社会資源の関係性を図にしたもの。

21

<コンサルテーションの視点>

- (1)「個々のケース(危機介入)」と「校内支援体制(予防的働き)」の両面でのコンサルテーションを進め、コンサルティが校内のコンサルタントになることで、それが校内に広がっていくように考えた。

22

- (2)従来からある学校の財産(「特別な配慮を必要とする生徒のチェックリスト」)を更に効果的に活用できるよう意味づけ、成功体験を通じて、さらに「短期の個別指導計画」や「学校と関係機関との関係図」、生徒の「エコマップ」など、新しいものに中学校が自ら取り組む意欲を高めるように考えた。

23

他校でコンサルテーションが進んだ事例

- ・D小学校 学校長を中心に積極的に専門家チームを活用し、児童観察とランチ・ミーティングを使ったケース検討会を積み上げている。初就の幼児で、就学支援ファイルが提出されたケースでは、学校長自ら入学式前に就学前機関を訪問し観察を行った。

\* 訪問: 平成24年度2回、平成25年度1回、平成27年度4回

24

・E小学校 3年間継続して関わる中で、毎年のようにケース検討を中心とした全校校内研を開催し、特別支援教育における教員の意識を切らせないようにしている。

\* 訪問:平成25年度5回、平成26年度2回、平成27年度2回

25

・F中学校 中学校のコーディネーターを中心に、専門家チームを活用し、校内ケース会を推進していったケース。このコーディネーターは、区内の他校へ異動した後も、専門家チームを活用して、校内のコンサルテーションを進めようとしている。

\* 訪問:平成23年度1回、平成25年度4回

26

水元特別支援学校コーディネーターの専門家チームとしての派遣実績(主となるCoは2名)

平成22年度	18回
平成23年度	27回+モデル事業(3学級)41回
平成24年度	38回+モデル事業(3学級)82回
平成25年度	57回
平成26年度	32回
平成27年度	33回

\* 幼稚園・保育園      6

園

小学校      49

校

27

リピート数の多い学校  
(平成22年度～平成27年度)

小学校 ①15回(A小学校)  
          ②14回(1校)  
          ③9回(E小学校)  
          ④7回(B小学校、D小学校)

中学校 ①16回(C中学校)  
          ②5回(F中学校、N中学校)

28

リピート数の多い学校  
⇒ 継続的なコンサルテーション  
⇒ 自律的・自覚的な取り組みへつながる

↓

予防的・開発的コンサルテーションを継続することで、学校力が高まる

29

考察

特別支援学校のコーディネーターが小・中学校を継続的に訪問し実施した学校コンサルテーション3事例を通じていえることは、以下の通りである。

1 コンサルタントとコンサルティという一方的な関係でかかわるのではなく、協働という視点で共に考え、共に悩むという姿勢が一貫している。

30

2 学校、教員のもつ専門性、指導力量を信頼し、手掛かりとなる情報を提供しつつ、学校の自律的・自覚的な取り組みを促進させている。



自立・・・必要に応じて支援を受ける力でもある

31

3 小学校又は中学校がそれぞれもつ「教育文化」ともいう教育環境、教育資源を尊重しつつ、現在の環境、資源で実施可能な具体的提案を行い、そこにケース検討会、個別の指導計画、教員同士のチームワークによる支援といった特別支援学校(教育)の文化ともいえる内容を小・中学校の実情に合わせてアレンジし盛り込んでいる。

32



特別支援教育で最終的に求められるのは、個々のケースの支援をどうするかというレベルの問題ではない。学校組織としての支援基盤、すなわち「学校力」を高める予防的・開発的コンサルテーションの在り方が問われている。

34

小・中学校の自律的・自覚的な取り組みへ

学校力を高める  
予防的・開発的  
コンサルテーション

他区エリアへの般化は可能か？

足立区東地区(本校学区)でも展開  
<葛飾モデルの広がり>

足立区エリアのセンター校より  
「小学校1校と3年間付き合うことで小学校が変わった」

東京都は区市町村によって特別支援教育の取り組み方の違いが大きいが、葛飾モデルの普及は可能か？

36

平成28年度の取り組み(葛飾区)

- ①教育委員会の組織改編
- ②特別支援教室(拠点校方式)  
小学校全校実施  
中学校モデル校  
→平成30年度全校実施を目指す
- ③N中学校の実践  
学校コンサルテーションが進んだ事例

37

①教育委員会の組織改編

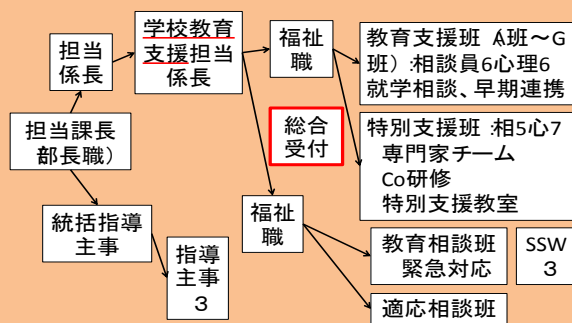
葛飾区総合教育センターが、教育のワン・ストップ・サービスの機能をもつ



特別支援教育から支援教育へ

38

H28 葛飾区総合教育センター業務組織図



②特別支援教室(拠点校方式)  
平成28年度小学校全校実施

東京都の拠点校方式  
(平成30年度までに全都で実施)

拠点校  
(A小学校)

巡回指導教員  
(両校に所属)

B小学校  
特別支援教室  
特別支援教室  
支援員(非常勤)

40

小学校49校に対して、  
拠点校7校(巡回指導教員50名)でスタート。

2カ月経過して

「葛飾区小学校教育研究会 特別支援教室分科会(平成28年6月15日)」でのワークショップ記録より(7拠点校:G校~M校)

41

G校

- 課題
- ①専門員を含めた巡回校との連携  
専門員の立場・仕事内容・学校との関わり方
  - ②特別支援委員会  
何を話すべきか(内容が決まっていない)
  - ③担任との連携の仕方  
面談日程等が合わない(時間がとれない)  
担任がつかまらない(担任が忙しそう)  
連絡帳に書けない内容をどう伝えるべきか  
教室への理解度が違う(担任が)  
抜けた時間のフォローの仕方(高学年)  
クラスに戻った時の支援の仕方
  - ④専門員同士の情報交換の仕方

42

## H校

- 課題 ①対応などを全校でどれくらい共通理解できるか  
 ②周りの子への理解(ずるい、何で)  
 →育てていく必要がある  
 ③知的に遅れがある子へのアプローチ(入室)  
 ④IQはある程度あるが、学力が積み上がらない子(事情が様々ある)

43

## I校

- 課題 ①学校外での問題行動が頻発している児童に対して、どのような指導や支援ができるのか  
 ②特支教室に入室させたいと学校側は考えているが保護者の同意が得られない。巡回指導教員の立場での関わり方  
 ③専門員が在籍校にいないことが理解されない担任に対してどのように連携していったらよいか。アプローチの仕方は？  
 ④巡回指導教員として、転入してきた教員が学ぶ機会(マニュアル的なものがあると)  
 ⑤児童同士の差別的な見方を解消するよい方法は(身体的な見方)

44

## J校

- 課題 ①個別学習の教材選びが大変。どのように教材の幅を増やしていけばいいのか  
 ②やればやるほど仕事はあるので、見切りをつけるのが大変  
 ③面談の設定の仕方(担任の先生もいると、保護者との関係が築けないのでは)

45

## K校

- 課題 ①巡回指導教員全員で集まるのが難しい(現状は、葛飾教育の日のみだが、講師の先生方が参加できない)→指導について話し合う時間がない(最低限の事務連絡をスマートフォンでしている)  
 特別支援教室に来づらい雰囲気→担任の先生をつかまえにくい  
 ②巡回指導教員が何をしているのかが伝わっていない  
 ③どのように妥協点を伝えればよいか。特別支援教育への理解(根本的に)  
 \* 葛飾教育の日:月1の土曜授業日

46

## L校

- 課題 ①特別支援教室、小集団、クラス分けについて  
 ②各巡回校の児童や指導の報告  
 ③連絡帳の内容  
 ④拠点校での児童との関わる時間について(週1回)  
 ⑤連絡帳を通して、保護者から児童の日常生活行動について相談を受ける

47

## M校


- 課題 ①自閉傾向の子供に全体での指示を聞けるようにする方法(個別なら聞ける、聞く必要性を感じていない、周りの真似をすればいいと思っている)  
 ②特別支援教室での活動のねらいや評価、子供の課題に対しての具体的な支援方法を知りたい、という保護者からの要望  
 ③取り出しの時間とプールの指導が重なっている

48



ワークショップでは、この後に具体的な解決策を各拠点校で検討

今のチーム(拠点校)で、話し合い、課題解決していくことの大切さを実感できた



始めなければ、課題が何であるかも分からなかった

49

③N中学校の実践(〇先生の事例)

コンサルティールからコンサルタントへ

- ・平成23～24年度  
モデル事業協力校の特別支援学級担任  
各小学校との引継ぎケース検討会の実施、「短期の個別指導計画」の作成と活用に協働して取り組む
- ・平成25～26年度  
特別支援学級担任 専門家チームを活用

50

- ・平成27年度  
支援学級担任  
特別支援教育コーディネーター  
研究部

通常学級に対する専門家チームの派遣  
校内研修会で特別支援教育を取り上げ、  
校内の専門性向上を図る  
(校内で特別支援教育の市民権を得る)  
校内委員会の運営において担任記入による「全生徒のアセスメント表」の活用

51

特別支援教育をテーマにした校内研修会


第6回校内研修会 生徒理解のために～  
子どもをみる力をつける～  
講義+ワークショップ(事例をもとに、対応策を考える)

第7回校内研修会 表現力とコミュニケーション能力の育成 ～説明できない、理由がわからない、順序立てて話せない、そんな生徒をどのように指導するか～

52

- ・平成28年度  
支援学級担任  
研究部主任

校内委員会を単なる情報交換だけでなく、  
ケース検討会の場にするを目指す  
(「いつ」「誰が」「何をする」を決定する場)  
全校での「短期の個別指導計画」の活用



校内委員会での専門家チームの活用

53

平成28年度 N中学校の校内研修主題  
「生徒理解を踏まえた指導の工夫」

全9回を予定  
第1回(4/26) 2、3年生の事例研究  
「短期の個別指導計画」の作成  
第2回(5/10) 1年生の事例研究  
小学校のコーディネーター参加  
第3回(6/29) 「短期の個別指導計画」の検証

\* 前半3回は、特別支援委員会が主催し(市民権)、全ての会に専門家チームも参加する

54

N中学校の成果

特別支援教育が学校教育の中核になる

↓

どの子供にもある多様なニーズに応える学校

O先生を中心に、校内におけるコンサルテーションが進む

↓

自立した、協働できる学校

55

O先生語録

(モデル事業で「短期の個別指導計画」を提案した時)

「個別指導計画なんて、作成に半年もかかっていたのに(今までは、全ての教科担当に記入してもらうために時間と労力がとてもかかった)、これならできるかもしれない(担当が自立活動的内容にしばって書けばいいので)」

56

月ごとの個別指導計画

平成 24 年度 9.9 月

生徒名	期間	8月 27日	～	9月 30日	記載者
○ ○ ○ ○					□ □ □ □
現状	目標	具体的な手立て	評価	次回の具体的な方針	
①言語を介さないコミュニケーションの仕方がない。手動で文章の書きに促せば発話がある。 ②書きや計算問題が得意で、漢字が得意。漢字の練習を毎日行っている。漢字の練習を毎日行っている。 ③漢字の練習を毎日行っている。漢字の練習を毎日行っている。 ④漢字の練習を毎日行っている。漢字の練習を毎日行っている。 ⑤漢字の練習を毎日行っている。漢字の練習を毎日行っている。	①発話が増えるようにする。 ②自立活動で身体を保持できるようにする。 ③漢字の練習を毎日行っている。漢字の練習を毎日行っている。 ④漢字の練習を毎日行っている。漢字の練習を毎日行っている。 ⑤漢字の練習を毎日行っている。漢字の練習を毎日行っている。	①(○)パルトループを実施したことで、次の行動について、本人も理解するようになった。言葉の練習を毎日行っている。言葉の練習を毎日行っている。 ②(○)パルトループを実施したことで、次の行動について、本人も理解するようになった。言葉の練習を毎日行っている。言葉の練習を毎日行っている。 ③(○)パルトループを実施したことで、次の行動について、本人も理解するようになった。言葉の練習を毎日行っている。言葉の練習を毎日行っている。 ④(○)パルトループを実施したことで、次の行動について、本人も理解するようになった。言葉の練習を毎日行っている。言葉の練習を毎日行っている。 ⑤(○)パルトループを実施したことで、次の行動について、本人も理解するようになった。言葉の練習を毎日行っている。言葉の練習を毎日行っている。	①今までのよりあらゆる場面で見聞させる。数字などで特長を認識させる。また、行動できないことを知らせる。 ②タブレットを画面で今までのより活用していく。手遊びなどは買ってもらいたい。 ③タブレットを画面で今までのより活用していく。手遊びなどは買ってもらいたい。		

57

(「短期の個別指導計画」を何度か作成して)

「各教科の先生たちから、こうしたら、という指導のアイデアを職員室で言ってもらえるようになった。こんなこと初めてです」


(通常学級でも「短期の個別指導計画」を作成するようになって)

「自分はやりたかったんだけど、みんなにはなかなか難しくて。研修会でできるようにするまで、2年かかりました」

58

障害児教育で築いてきた財産が生きています

- 一人一人の実態を把握する(全体像としての子供をみる)
- チームワーク(職員室では子供の話が中心)
- 粘り強さ(あきらめない、思いは通じる、良いものは残る・・・)



59

ご清聴ありがとうございました



お問い合わせ

Kouichi\_Hidaka@member.metro.tokyo.jp

60